

## 2サムエル 21 章 7-9 節 「傷ついた道」

### 1A 神に対する罪

1B 四百年前の盟約

2B 変わらない掟

### 2A 支払うべき対価

1B 七人の息子

2B 報復の神

### 3A 呪い

1B 神の約束にある祝福

2B 神との交わり

3B 身代わりの死

### 4A 癒し

## 本文

サムエル記第二 21 章 7-9 節を開いてください。午後は 19 章から 21 章までを読んでいます、今朝は 21 章 7-9 節に注目してみたいと思います。

7 しかし王は、サウルの子ヨナタンの子メフィボシテを惜しんだ。それは、ダビデとサウルの子ヨナタンとの間で主に誓った誓いのためであった。:8 王は、アヤの娘リツパがサウルに産んだふたりの子アルモニとメフィボシテ、それに、サウルの子メラブがメホラ人バルジライの子アデリエルに産んだ五人の子を取って、9 彼らをギブオン人の手に渡した。それで彼らは、この者たちを山の上で主の前に、さらし者にした。これら七人はいっしょに殺された。彼らは、刈り入れ時の初め、大麦の刈り入れの始まったころ、死刑に処せられた。

私たちは前回の学びで、ダビデの息子アブシャロムが死んだところまで読みました。その後、ダビデはエルサレムに戻るようになります。そしてダビデの生涯は晩年に差しかかります。彼の王としての生涯の終わりに、はるか前に犯した罪がまだ残っていたことが発見されます。それで、ダビデは神が示されるままに、その問題に対処していきます。その罪は彼自身が犯したのではなく、また犯した本人もすでに死んでおり、けれども殺された者たちの家族だけがその傷を負ったまま生きていました。神はそのことを覚えておられて、イスラエルの王として立てておられるダビデに、そのことを解決するように促しておられます。

私たち人間がよく知っているのは、お互いの関係において、加害者は自分のしたことを忘れているけれども、被害者はいつまでも覚えているということです。政治的にはなりたくないのですが、来日した前大統領の李明博氏が次のような自分の体験を話していたのを思い出します。ご自分が

幼い時に学校でガキ大将なものから思いつき殴られたそうです。何十年も経って同窓会が行われました。そこで自分を殴った本人も来ました。その昔の思い出を話すと、彼はまったく記憶に覚えていない、ということでした。殴った人は忘れるけれども、殴られた人は覚えています。

加害者は覚えていませんが、被害者は覚えています。そして加害者は何も起こらなかったように、その後の人生を過ごしますが被害者はその後遺症の中で悩まされます。けれども、神は覚えておられます。そして、神はご自分の民、またご自分の国を愛しているゆえ、そうした加害行為をそのままにして欲しくないと願われました。ダビデ、そしてイスラエルを愛しているゆえ、あえて三年間引き続いて、飢饉を与えられました。ダビデが三年間連続の飢饉によって、これは何か主が特別な思いを抱いておられるのではないかと思って祈ったら、確かにイスラエル人が虐殺を行なったことを示されたのです。

## 1A 神に対する罪

### 1B 四百年前の盟約

それはサウルとその一族が犯した罪でした。ギブオン人を殺していたのです。ギブオン人は、神がかつてイスラエルに聖絶しなさい、つまり抹殺しなさいと命じられたエモリ人の一部です。だからサウルはイスラエルの地にいるギブオン人を虐殺したのですが、それはとんでもない過ちでした。ヨシュアの時代、ダビデの時代から約四百年前の出来事ですが、ギブオン人は変装して遠い国からやって来たと偽り、イスラエル人が聖絶を命じられている住民ではないとイスラエル人は思いました。それで互いに害を与えないという盟約を結んだのですが、三日経った時に彼らがすぐそばに住むギブオン人であることが発覚しました。けれども、主にかけて誓ったゆえ、彼らは手を出すことはできなくなりました。その代わりにヨシュアはギブオン人に、主を礼拝する祭壇のための仕事に就かせました。祭壇の火をくべるためのたきぎを割る仕事、また水洗いのための水汲みの仕事を課しました。

このことによって、ギブオン人は確かにエモリ人でありましたが、忌まわしい偶像礼拝をすることもなく、イスラエルと共に生き、イスラエルの神をあがめる者として生きてきました。それでもう四百年近く経っています。ところが、サウルがイスラエルを敵から救う、忌まわしいものを除き去るという熱心さのゆえに、かつて結んだ盟約を無視して彼らを虐殺したのです。ちなみにサウルは、主が永遠に戦われると言われたアマレク人については、その王を生かしてしまったのに、主にあって誓った盟約についてはないがしろにするという、主の命令を軽んじた人物であります。

サウルとしては、もう四百年前の約束事だから・・・という言い訳ができたでしょう。けれども、イスラエルの神は永遠に生きておられる方です。この方は時間に関係なく、その約束事を有効とみなします。ですから時代が変遷しても、罪は罪なのです。そして、サウルがこの罪を犯した後、すでに数十年も経っているのに、それでも神は変わることなく罪を覚えておられました。日本語の諺に、「水に流す」という言葉があります。いいえ、罪は罪として残るのです。日本の法律で最近まで時

効というものがありました。殺人などの重罪では適用されなくなりました。永遠の神は、人間の一人一人に時効なしに罪を覚えておられます。

私たち人間には、こうして覚えられている罪の総精算の時が定められています。終わりの時、天も地も過ぎ去り、大きな白い裁きの座が据えられます。これまで死んだ者が死後の世界である陰府から出てきて、全能者である神の前でこれまで自分が行なったことを申し開きするのです。そして、行ないの書物というものを神は持っておられます。これまで行ったことの全てがそこに記録されています。「また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた。(黙示 20:12-13)」

多くの方が、自分はこれからの善行によって、今まで行った悪行を打ち消すことができると思っています。これまで確かに過ちを犯したが、これから良い行ないをすればそれによって過ちを見逃してもらえるのではないかと期待するのです。いいえ、例えば殺人の罪を犯した者は、その殺人のゆえに死刑あるいは無期懲役になります。その人が殺人の後にいかに善行を行なったとて、その殺人は殺人として覚えられて、刑に処せられるのです。全知全能の神の前では、なおさらのことそうなのです。

## 2B 変わらない掟

神は変わらない方であるし、またその御言葉も変わりません。サムエルがサウルに言いました。「実に、イスラエルの栄光である方は、偽ることもなく、悔いることもない。この方は人間ではないので、悔いることがない。(1サムエル 15:29)」ヤコブが手紙でこう言っています。「父には移り変わりや、移り行く影はありません。(1:17)」そして、「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。(13:8)」とヘブル書にあります。そしてこの不変なる方が語られる言葉は、どの時代に入っても何ら変わることなく、私たちに語りかけるのです。

数多くの方が、昔教えられたことはその昔のものであり、今は異なるのだ、と言います。今は古とは違うのだから、今は今の掟があると言います。これは現代人の高慢です。私は、二年前の津波から多くの例をこれまで説教の中で引き合いに出していますが、津波というのは人の有様を明らかに映し出す出来事です。津波について、現代の防災知識によって数多くの方が亡くなりました。けれども、先人からの言い伝えによって逃げた人々、また津波がここまで押し寄せてきたという記念碑があるところまで逃げた人は、津波を免れることができました。最近建てられた防潮堤は全て倒れ、昭和一桁に建てられたものはその原型を留めました。津波という脅威は脅威であり、それはいつになっても変わらないはずなのに、時代が過ぎれば変わると思い込んでいる私たちのほうが愚かなのです。

紀元一世紀にローマに住む人々に書いた使徒の手紙の一部を読みます。「彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪くみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。(ローマ 1:29-31)」いかがでしょうか？紀元一世紀と言えば、日本では弥生時代です。その時代に生きていた人々に語りかけられたこれらの言葉は、まるで現代社会の私たちの姿を映し出しているようです。神は変わらぬ言葉を持っておられますが、同じように人も変わっていないのです。

## **2A 支払うべき対価**

### **1B 七人の息子**

ダビデはギブオン人のところに行きました。そして、どのようにすれば主から与えられたこの地を祝福することができようか、と尋ねました。彼らは興味深い回答をしています。21章 4-6節にありますが、金銀のことではない、そしてイスラエル人を数多く殺すことでもない、そうではなく、自分たちを滅ぼそうとしたサウルの息子七人を引き渡してほしい、と言いました。サウルの故郷ギブアでさらし者にする、と言いました。

当時の社会、いや今日の社会でも、このような事件を利用していかに相手から金を巻き上げるか、ということを考えます。アメリカの友人と話しますと、根も葉もない訴状を掲げて賠償金を支払うよう要求する裁判があまりにも多すぎる、と聞いたことがあります。そのようなことをギブオン人は要求しませんでした。また、自分たちが絶滅させる意図でサウルは彼らを虐殺したのですから、イスラエル人を同じように打ち滅ぼす勢いがあってもおかしくありません。戦争の中では昔だけでなく今でも似たようなことが起こります。けれどもギブオン人たちはそれも求めませんでした。

彼らは主の掟や基準に照らし合わせて、公正だけを求めたのです。サウルが殺したのですから、サウルが死ななければいけません。けれども、彼はずっと前にペリシテ人との戦いの中で死んでいます。そこで彼らは息子七人を選んでほしい、と言いました。「七」という数字は聖書の中で完全数を表しています。六日の天地創造と七日目の安息など、神の数字です。イスラエルにおいて流された血の対価を、サウルの息子の七人のみの死によって完全に支払われたことを求めました。

### **2B 報復の神**

モーセの律法の中には、刑罰の程度についての掟があります。一般の人にもよく知られた言葉です。「しかし、殺傷事故があれば、いのちにはいのちを与えなければならない。目には目。歯には歯。手には手。足には足。やけどにはやけど。傷には傷。打ち傷には打ち傷。(出エジプト 21:23-25)」危害を加えた者は、自分が行なったことに対する同じ害を被ることによって、その対価を支払うことにあります。これは個人的恩讐のはけ口ではありません。イエス様は弟子たちに、「迫害する者のために祈り、祝福しなさい。」と命じられました。キリスト者であれば特に、個人とし

て愛と赦しをむしろ願い求めます。けれども、司法において正義を執行しなければいけない時には、量刑は加害と等しいものにしなければいけない、という定めです。

神は、復讐の神、あるいは報復の神とも呼ばれます。「神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。忍耐をもって善を行ない、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠のいのちを与え、党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。患難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、悪を行なうすべての者の上になり、栄光と誉れと平和は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、善を行なうすべての者の上にあります。神にはえこひいきなどはないからです。(ローマ 2:6-11)」私たちは、心のどこか奥底で自分に対してえこひいきしています。つまり、他人については、その人の悪い行ないにふさわしい報いを願いますが、自分のしたことについては憐れんでほしい、また憐れんでくれると思っています。けれども神にはえこひいきがありません。

そのような、自分自身に対する安易な見方を戒める言葉をイエス様は語られています。ローマ総督ピラトが反逆するガリラヤのユダヤ人に対して、罰としてガリラヤ人の流した血をガリラヤ人のささげるいけにえに混ぜました。たいそう酷いことだと他人事として見ている人々に対して、イエス様はこう言われました。「そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。(ルカ 13:2-3)」いつまでも、自分だけは災難から免れると思っているのが不思議にも私たちですが、災難というのは神の、私たち自身に対する悔い改めの注意喚起なのです。

東北地方の津波を、いつまでもそこに住む人に神が怒りを発せられたのか？などという質問や主張を聞くにつけ、辟易します。そうではありません、イエス様の言葉に従えば、津波の被害を受けなかった者たちこそ、東北海岸地域ではない人々こそ、悔い改めなければそのように滅びるのだ、という警告であったのです。自分を神の裁きの中にいつまでも含めない態度を悔い改めなければいけません。

### **3A 呪い**

#### **1B 神の約束にある祝福**

そして七人の者をギブオン人たちは処刑し、さらしました。木につるしたのだと思われます。モーセの律法にはこう書いてあります。「その死体を次の日まで木に残しておいてはならない。その日のうちに必ず埋葬しなければならぬ。木につるされた者は、神にのろわれた者だからである。(申命記 21:23)」

イスラエルには、神の授けられた土地を神が祝福されることが約束されています。雨も降らせてくださり、土地を潤します(レビ 26:3-5)。けれども主に背けば、主はまったく雨を降らせず、その地

は鉄のようになり、埃だらけにして呪われると言われます(申命記 28:23-24)。ですからダビデは、三年間の飢饉を主からの呪いではないかと気づいたのです。

そして、モーセの律法には罪のない者の血を流せば、土地を汚すことになる主が言われています。そのため、その血を流させた者の血によってのみしか、その土地を贖うことはできないとあります(民数記 35:33)。つまり呪いから解放され祝福された土地を取り戻すには、殺人者が死刑に処せられるしかない、とあります。それでサウルの息子七人が父の代表として死刑に処せられました。

## 2B 神との交わり

聖書は初めに、神がご自分の創造したものを祝福することから始まります。光、陸、植物、月や星、太陽、魚、陸上の動物、そして人を造られて、「見よ、非常によかった」と言われました。そして七日目は休まれて、その日を祝福されました。人は神から祝福されるために造られました。けれども、初めに神が造られたアダムが神に背くことをしたので、呪いがこの地に入りました。女は産みの苦しみをし、男は汗水流して働き、苦しむことになる神は言われました。人は未だ、その呪いの中にいるのです。

その呪いの主たるものは、神を怖い存在として見なすことです。神がエデンの園を歩いておられると、アダムとエバは恐ろしくなってわが身を隠してしまいました。これが霊的な死、神と人との亀裂です。その行き着くところは肉体の死であり、また死後の永遠の滅びであります。あらゆる善を持っておられる神から離れることこそ、恐ろしいことはありません。

そしてこれは互いの交わりにおいても同じです。兄弟と敵対している時は、その兄弟との交わりが絶ち切れてしまうだけでなく、神との交わりも断ち切れてしまいます。「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。(1ヨハネ 3:15)」神を愛し、また仲間の人を愛することから離れている時、その人は断絶という呪いの中にいるのです。

## 3B 身代わりの死

そして最も大切なのは、この七人の息子は身代わりに呪われたということです。まず父サウルの身代わりになりました。次に、イスラエル全体の身代わりになりました。その土地が贖われるための対価となったのです。それから実は、ダビデはサウル家に身近な存在で、ヨナタンの子メフィボシエテがいました。けれども、メフィボシエテはヨナタンとの契約で恵みを施すとダビデが決めました。だから彼を惜しんだのです。ですから、七人の子はメフィボシエテの身代わりともなったのです。

彼らの姿は、後に神がご自身の内で行なわれることに通じます。神は、私たちが犯したこれまで

の罪のすべてを私たちにその罪の対価を背負わせるのではなく、身代わりにご自分の子キリストに負わせました。キリストは木の上で神の呪いを受けられました。そのことによって、私たち自身が神の祝福となるようにしてくださいました。「キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてのろわれたものである。」と書いてあるからです。このことは、アブラハムへの祝福が、キリスト・イエスによって異邦人に及ぶためであり、その結果、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるためなのです。(ガラテヤ 3:13-14)」

キリストを信じることによって神の御霊を頂きます。これは祝福です。エペソ5章18節に、「また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。」とあります。ある若者が悩みを分かち合ってくれました。彼は奥さんとの関係が悪化し、離婚してしまいました。毎日、お酒から離れることができないそうです。私は、自分はお酒を過去にたくさん飲んでいましたが、一切飲まなくなったことを話しました。それでも、心が満たされていること、教会の人たちはお酒なしで楽しんでいることも話しました。彼の目が大きくなりました。どうやって酒なしに楽しめるのか？と不思議だったようです。

それは、キリストが代わりに自分の罪と重荷を負ってくださったからです。木にかけられて呪われた者となってくださったからです。それによって、神がご自分の御霊をキリストを信じる者に与えられ、聖霊の実である愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制を与えてくれるからです。これは自分自身が培うものではありません。あくまでも上から来る賜物であり、神ご自身が自分の心と生活に生み出してくださいるものです。自分の頑張りや到達しようとするのは呪いです。なぜなら、できないからです。けれども自分にはできなくなっていることを、神がキリストにあってしてくださいました。

#### 4A 癒し

そして最後に、イスラエルには癒しが与えました。飢饉が続いていたイスラエルの地に雨が降り始めたのです。神が祈りを聞いてくださいました。「しかし、彼(キリスト)は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。(イザヤ 53:5)」私たちは自らの罪によって傷ついた者です。全身が傷だらけです。けれども、キリストが受けられた傷があります。そのために、イスラエルの地が癒しを受けたのと同じように、私たちの魂、また時には体にも癒しを受けます。